

旅立つ皆様へ(学位記授与式の学長式辞に代えて)

暖かい日の多かった冬も終わりを告げ、桜の開花も間近い龍王山から望む周防灘も春めいて、柔らかな日差しが心地よく感じられる季節となりました。

このたびは新型コロナウイルスの流行により、一堂に会しての式典こそありませんでしたが、山口東京理科大学工学部並びに大学院工学研究科の所定の課程を修了された皆様、おめでとうございます。皆様の物心両面で支えてこれ、今日の良き日をとともにお迎えになられたご家族の皆様にも、心よりお祝い申し上げます。

大学や大学院で過ごした歳月は、短くもあり、長くもあったと思います。どちらにしても、この大学生活の間に皆さんは大きく変わりました。入学以来、皆さんを目のあたりにしてきた私自身、皆さんの物事を観る視野の広がり、知識や知恵の深まりを感じます、それらは、皆さんの真摯に学ぶ行動や人とのつながりを通してもたらされたものだと思います。本学が、皆さんの成長に少しでもお役に立てたならば、これ以上の喜びはありません。

そして、大学や社会を取り巻く環境も、入学した頃とは大きく変わってきています。地球環境の破壊が進む中、様々な地域が自然災害に見舞われ、未曾有という、いまわしい表現が多用されるようになったのもこの数年です。政治や宗教の対立や地域格差、東アジアや中東の緊張、テロの頻発や悲惨な爆撃、そして感染症の蔓延により多くの犠牲者が出ています。大国の保護主義や自国第一主義の高まりも、人類社会に複雑さと深刻さをもたらしています。皆さんを卒業生として社会に送り出すに際し、時代背景の難しさを想わざるを得ません。

時代が令和に代わった今、世界が混沌とした状態から抜け出し、人類が希望ある未来に向けて成長できる鍵は、まさにその原動力となる科学技術の力であり、この変革期に即応できる能力を持った人材にあると言っても過言ではありません。

ここで学んだ工学や科学技術の知識を力に、あらゆる困難に正面から立ち向かい、それぞれの目的に向かって邁進してほしいと願っております。皆様こそ、新しい時代を創る主役であってほしいと思います。

さて、ご卒業に当たり、学部や大学院での日々を共に学び抜いた、ひとりの教員として、社会の先輩として、学び舎を後にする若者に必ず伝えておきたいことをふたつ述べさせていただきたいと思います。

ひとつは、「学んだ工学や科学技術に自信をもって生きてください」ということです。

この三月十一日は、東日本が大震災に見舞われ、多くの尊い命が失われてから九年目の日でした。私は、その一週間後に被災した北関東から本学に赴任いたしました。津波による災害と原子力発電所の事故は人々の生活に大きな影を落とし、直近の調査では、死者・行方不明者は一万八千四百二十八人にのぼります。しかし、津波にも人々の心までは流されず、多くの人たちが支えあい、励ましあって復興の努力を続けておりますことは日本人としての誇りです。

皆様が在学した年月にも、世界や日本の国土で、多くの天災、人災に関わる出来事が起き、記憶に新しい昨夏の台風による千葉県での災害、九州の豪雨、北海道、東北、九州等で起きた地震の被害をはじめ、まだまだ爪痕を残しております。

どんなに科学技術を尽くしても、人知で制御できない現実に落胆することが多くありました。そのような中、将来は災害を未然に防ぎ、あるいは最小限の被害に抑えられるように、工学の知識や科学技術を修学することこそが、今、自分たちにできる最善の対応であるとして学び続けた、皆様の真摯な姿勢は断じて揺るがないものであったことを誇りに思います。

こうした時代にありますが、世間では多くの文化人や科学技術を職業とする人達までもが、科学技術の無力を語り、その否定まで言われます。もはや、科学技術は信じられないと。

確かに科学技術や工学はいまだ未熟であると言わざるを得ません。その使い方や限界を見誤ると、戦争や人類の破滅にもつながりかねません。私たち教員は、いつも人間としての教養や感性を磨くことの重要性を語り続けてきました。専門知識だけを身につければよいというものではありません。如何に科学知識や研究の成果を正しく用いるかの判断能力や倫理性こそが今こそ大事なのです。時には、その限界を自覚して次善の対応に一時、甘んじなければならないこともあるでしょう。

皆様は、理工学の知識を学んだものとして、それをよすがとして、これから社会に出て生きていかなければならないのです。どうか、科学技術や工学の力を信じて自信をもってください。感染症を予防し、地震を予知し、津波に備え、原子力の課題を明らかにして、いつの日か問題を克服して解決を図るのは我々、工学や理学に携わる者、研究者や技術者のつとめに他なりません。科学技術に裏付けられた正論こそ私たちの行動指針なのです。社会に出て、ぜひ、それぞれの学科や研究科で学んだことに自信をもち、正しい道を求め続けてください。

時には周りに受け入れられないこともあるかもしれませんが、正しいと信じる道を貫いてください。思いは必ず通じます。この地で百六十年も前に若者に希望を持てる教育を行った、吉田松陰先生の示された、「しせいてんにつうず」の精神です。誠意を尽くせば、必ず人々の心は動かせるのです。

私が今日、申し上げておかねばならない、もうひとつのことは、「生涯、学び続けてください」ということです。

ご卒業というおめでたい席に水をさすようで心苦しいですが、卒業といっても、たかが大学の卒業に過ぎません。

人類が長い時間を経て、今、豊かな文明を享受できているのは、地球環境に適合した生物学的な進化もありますが、同時にたゆまぬ知識の蓄積があったからです。その進化の最前線にいる私たちこそ、新しい知識を学び、蓄え続けることを怠ってはなりません。学ぶことをやめたときが人類文明の終焉であります。

皆さんは最高学府まで学び続け、今、ひとつの節目を迎えましたが、学びに卒業はないのです。人は一生、学ぶべき使命をおっているのです。私が

申し上げます、学ぶとは、大学や大学院で学ぶ専門知識や技術だけではありません。あらゆるものごとを対象とします。あらゆる場で、あらゆることから、あらゆる人から、学び続けてください。

私は、半世紀前に大学を卒業させていただきました。決して優秀でもなければ勤勉な学生でもなく、大学卒とは名ばかりで、仕事に就いた途端、何もわからず途方に暮れたことを思い出すと、今でも、冷や汗が出ます。社会に出てから多くの方々から仕事や様々な活動を通じて学び、追い詰められた気持ちで知識や技術の習得に励みました。昼間聞いたことが分からないのが悔しくて、仕事の帰りに専門書を買って求め、徹夜して読んだことが数えきれないほどありました。必要に迫られて必死で身に着けたものこそが本物の知識です。

世の中にはいろいろな事情により大学で学ぶことのできない人たちがたくさんいます。私たちの身の回りにもおられます。七十数億人といわれている人類からすれば、大学で学ぶ、恵まれた人はほんの少数です。したがって、知識を身に着け自分を高めるところを大学と言うのでしたら、多くの人にとっての大学とは自分のいる場所であり、組織であり、会社であり、家庭であり、社会そのものなのです。

学歴としての大学や大学院卒で人を判断してはなりません。どんなに知名度の高い大学を出た人でも学ぶ姿勢を忘れた人は失格です。学歴がなくとも社会という大学で研鑽をつまめた、立派な方が身の回りにも大勢いらっしゃいます。ぜひ、これからは、周りの方々を師と思い、あらゆる場で、あらゆることから、あらゆる人から、学び続けてください。そして、ひとりひとりが属する社会の組織をこれからは大学と思い、いつか、そこを卒業するつもりで励んでください。

さて、人生百年の時代、これからも学び続けなければなりません、本日は、人生、ひとつ目の大学の卒業です。されど、このひとつ目の大学こそ、人生で最も多感で重要な時期を過ごした、去りがたき場所です。これからいろいろなことがあるでしょう。苦しいとき、つらいときには理科大での学びの日々や、かけがえのない友のことを思い出して勇気を奮い立たせてください。

素晴らしいことに巡り合えた時には、私たちを思い出して、少しでも、そのおすそ分けを運んできてください。いつでも私たちは皆様のことを待っています。理科大は皆様のかけがえのない母校なのですから。

さて、その母校ですが、皆様の在学したこの四年間は、大きな転換の時期でした。今年の学部卒業生の多くが入学した前年の平成二十七年の八月に公立大学法人設立の申請を行い、同年十二月に公立化の認可を頂き、平成二十八年四月に公立大学に移行し、皆様が公立大学の一期生となったわけです。さらに、平成二十九年三月には薬学部設置の申請を行い、同年八月に認可を頂きました。平成三十年四月から薬学部が発足し、工学と薬学のふたつの実学の学部よりなる大学へと素晴らしい発展をしてまいりました。これらの過程においては、この大学の存続と発展を願う多くの方々の献身的なご支援、ご努力があったことを私たちは決して忘れることはないでしょう。

公立化し、設立母体が変わるといふ大きな変化の中でも、本学の教育姿勢は微塵も揺らぐことなく、真摯に皆さんの勉学意欲に応えました。学ぶ皆様、特に一期生の皆様は教職員とともに、新しい大学を創る意志に燃え、よく修学してくれました。薬学部の校舎の建設にあたってはキャンパスに槌音が響き渡り、大型のクレーンが何基も並び、テニスコートやグラウンドも使えなくなるという、心穏やかならぬ時をすごしたこともありましたが、皆様は、環境の変化をものともせず、たくましく学び、新しい大学と一緒に創り上げて頂いたことを感謝致します。

いつまでもこの、風さわやかなキャンパスを忘れないでください。懐かしい土地を忘れないでください。きららビーチの心洗われる夕日、龍王山から見た山陽小野田の穏やかな街並みを忘れないでください。暖かく、皆さんを包み込み、育ててくださった地元の方々を忘れないでください。旅の途中にこの地に毎年戻ってきてくれる愛おしい旅する蝶、アサギマダラのように、いつとき遠く離れて行く人も、やがて、この地に戻ってこられる日を心待ちにしております。

それでは、大変、おなごり惜しいですが、皆様のこれからの夢に向かって
のご活躍を心より願いながら筆を置くことといたします。

令和二年三月十八日
山陽小野田市立山口東京理科大学長
森 田 廣